《論　文》

『霊界物語』における台湾

窪田　高明

梗概

この論文が主たる対象とするのは、『霊界物語』第二十八巻、すなわち「海洋万里」篇「卯の巻」の第一篇から第三篇である。目的は、『霊界物語』全体の内容、またその著者、出口王仁三郎（でぐちおにさぶろう）の思想を理解するために重要なものと考えられる論点を取り出すことである。そのために、次のような順序で論述を進める。まず、『霊界物語』について最低限の説明を行なう。ついで、大本神話における台湾の意味、第二十八巻の具体的な内容について検討する。また大本の台湾布教などを参照し、第二十八巻における台湾記述の特質を理解する。最後に、以上の考察をふまえ、出口王仁三郎の思想全体を考察するために有効な論点を検討する。

1　大本教と『霊界物語』

以前、大本教は、日本を代表する新宗教として昭和の中頃まではかなりよく知られた存在であった。しかしその後、その存在感は徐々に低下し、今ではその内容を知っている人は少なくなっている。大本教という名称すら知らないという人も多い。となれば、その聖典である『霊界物語』を知っている人はさらに少ないというのが現状だろう。そこでまず、出口王仁三郎という人物、『霊界物語』がどのような書物であるかということを、簡単に記述しておこう。(1)

出口王仁三郎は、一八七一年（明治四）に京都府の亀岡で生まれた。当時の名前は上田喜三郎といった。彼は、一八九八年（明治三十二）、出口なおという女性にはじめて出会った。なおは、綾部で小さな宗教集団を作っていた。この段階

では明確な教団の名称も持たず、神がかりする老女を中心とする地方の小集団にすぎなかった。翌年、喜三郎はなおの教団に参加した。その後、上田喜三郎はなおの末娘であった澄（すみ）と結婚し、出口王仁三郎となる。彼は、そのたぐいまれな企画力と行動力によって、なおの信仰集団を発展させた。大本は、まったく異なる個性をもつなおと王仁三郎の二人を中心として、活動を展開した。大本ではなおの女系が教祖を継承することに定まっており、なおが死ぬと、澄が二代目教祖となったが、教団の中心は王仁三郎となった。その頃、教団は時代の危機を声高に唱えたため、危険な集団とみなされ、一九二三年（大正十二）に第一次の弾圧を受けた。そのため、教団はいったんはその規模を縮小した。しかし、王仁三郎はその後、教団の再建に乗り出した（大正天皇の死去に伴い、王仁三郎は大赦となっている）。この事件以後、従来、大本が宗教的な表現として用いていた、神の声を聞いてそれを書き記す「筆先（ふでさき）」といわれる方法は続けることができなくなった。それまで、教団が正式に聖典として認めていたのは、なおの「筆先」を王仁三郎が原稿にして発表した『大本神諭（しんゆ）』と呼ばれる文章群である。大本では、なおだけでなく、王仁三郎も「神諭」を書いているし、それ以外にも「筆先」的な文章を残している人もいる。しかし、第一次弾圧の裁判の結果、この種の文章を使って信仰を表現することはできなくなった。『霊界物語』が作られた一つの要因は、このような事態に対応するために新しい宗教表現が求められていたことだといわれている。

2 『霊界物語』の成立と特徴

王仁三郎は、『霊界物語』の口述を、一九二一年（大正十）十月十八日に開始した。「一巻分が平均三日間というスピードで進められ、大正十年十二月にははやくも第一巻が刊行され、翌年末には四十六巻、そうして大正十五年末に第七十二巻で、ひとまず中断された。ときに、王仁三郎五十五歳である。七十三巻の『天祥地瑞』が昭和八年に口述され始め、翌九年に八十一巻に達したが、結局未完に終わった[2]」という。

八十一巻というが、実際には第六十四巻が上下に分かれ、さらに王仁三郎の「蒙古」行きを題材とした『入蒙記』が特別篇として加えられている。一巻は単行本で一冊分の分量を持っている。文庫本の体裁で一巻一冊として出版されている愛善世界社版では、全部で八十三冊になっている。要するに、『霊界物語』は長編として知られる『大菩薩峠』や『南総里見八犬伝』を大幅に上回る、長大な物語なのである。

ここまでくると、量自体が一つの問題になるのかもしれない（大宅壮一）。しかし、量とともに問題なのは、『霊界物語』

が明確な構成をもっていないことである。物語全体が統一的な構成で編集されているわけではないし、そうした不統一は多くの巻の内部においても見ることができる。普通の物語であれば、全体の構成を説明し、それによって作られる物語の粗筋、あるいは口述者が物語に託した意図、主張といったものを記述することができるだろう。ところが『霊界物語』では、そのような方法は到底使えそうもないのである。

『霊界物語』の大部分を占めるのは、王仁三郎が一八九八年（明治三十一）に高熊山で修行をした際に瞑想の中で見た、霊界におけるさまざまな出来事なのである。ところが、その出来事、およびその記述である物語は、因果の連鎖による展開をもっているわけではない。場面や登場人物が大きく変化するため、一つの筋書きでまとめることは不可能なのである。霊界の出来事なので、登場するのはすべて神ということになっている。たびたび出現するのは、神々が「神宝の玉」を求めて争うという話である。この「神宝の玉」について、飯塚弘明は七組の玉をめぐる争いがあると記述している[3]。ところが、神々が玉を求めて、さまざまな争いを繰り広げるにもかかわらず、この玉を獲得することで、何か決定的なことが起こるわけではない。玉の争奪をめぐる争いには、霊界の主導権争いが伴っているが、玉が決定的な役割を担っているわけでもないようなのだ。時には、玉を求める執着が批判されたりすることもある。また、この争いの過程でさまざまな男女関係のもつれが加わることも多いが、これも多くの場合、神話の中でどのような意味を持っているのか、はっきりしないように思われる。もちろん、稚桜姫（わかざくらひめ）の場合のように、重要な意味を持つ場合もある。だが、それはかえって、他の男女関係のもつれをどう受け止めればよいのか、読者を戸惑わせる結果になる。しかも、『霊界物語』には、そうした神々の物語とはかなり性格を異にする内容も含まれている。たとえば、「舎身活躍」最初の二巻、すなわち子の巻（第三十七巻）と丑の巻（第三十八巻）は、王仁三郎の自伝的な記述である。特別篇とされる「入蒙記」は「満州」に潜入したときの記録である。「山河草木」の子の巻（第六十一巻）には大本の賛美歌が集めれており、丑の巻（第六十二巻）は和歌だけで構成されている。こういう部分は、物語としては読みようがない。

『霊界物語』は、その量の膨大さと内容を理解することの難しさのためか、大本の教団内部でもかならずしもよく読まれていたわけではないようである。王仁三郎自身がそのことに言及しており、教団内で読む者が少ないことを嘆いている（『新月（しんげつ）の光（かげ）』）。また、『霊界物語』の普及に努力している飯塚弘明も、「大正十年（一九二一）十二月に第一巻が出版されてから九十年も経つのに、未だにほとんど読まれていませ

ん。（中略）霊界物語の存在はほとんど知られていないのです[4]」。

つまり、大本教の出口王仁三郎という人物は、ある程度知られているが、その代表的な著作である『霊界物語』は名前をあまり知られていないばかりか、読まれていない文献だということになる。

3 『霊界物語』要約の試み

『霊界物語』のような膨大な著作を前にしたとき、読者としては全体を理解するために要約や見取り図を参照したくなる。登場人物が多く、舞台も変化し、時間的な関係も把握しにくい作品の場合、それを整理したくなるのはきわめて当然の要求である。しかし、『霊界物語』の場合は、あまりにも内容に変化が多く、そうした整理は困難を極めるようである。

ここでは、先行研究の紹介という意味も含めて、こうした要約の試みのいくつかを紹介する。

『霊界物語』を要約したものとしての代表的な労作に、木庭次守の「霊界物語 梗概」がある。これは、『霊界物語資料篇』（一九七一年八月、大本教典刊行会）の大部分を占める形で出版されたものである。木庭次守は大本の信者で、出口王仁三郎に親しく接し、第二次弾圧の際も、教団のために奔走した人物である。木庭の経歴は、彼が王仁三郎の言葉をまとめた『新月の光』に付された「編者略歴」に、次のようにまとめられている[5]。

大正六年一月一日、木庭才記、フデの第三子（長男繁、長女フサエ、次男次守、三男輝男）として熊本市本荘町六四五番地に生まれる。熊本市立本荘尋常高等小学校を経て、熊本県立師範学校第一部入学。三年の頃、大本の出口王仁三郎教祖の教えに感動して休学。昭和八年七月、大本運動に参加する。大本九州別院から、人類愛善新聞の頒布に従事し、九州及び山陽山陰地方、近畿地方を行脚。精神国防運動、皇道宣揚運動に参加する。昭和神聖運動に参加し、講演、座談に従事し九州を巡る。大本第二次事件で検挙され、百五日間投獄される。昭和十三年三月三日より昭和二十年十月十七日勅令による大赦令で免訴となるまで専ら弁護活動に従事。出口王仁三郎聖師と夫人の大本二代教主出口澄子刀自の下で大本の新発足のために尽力し、日本全国で講演、講座、座談をして、新日本建設運動と大本の神教宣布に専念した。また世界連邦運動に参加した。

二度目の弾圧の際には、木庭自身も捕らえられたが、その

後も、王仁三郎と大本のために尽力した。彼は、『霊界物語』の拝読と研究にとくに熱心であった。その彼が、『霊界物語』八十二巻全巻の「梗概」を作成したものが「霊界物語 梗概」なのである。「梗概」とはいえ、A5版二段組で四〇〇頁以上もある大冊である。では、この書籍を通読すれば、『霊界物語』の全貌をつかむことができるのだろうか。それぞれの巻にはそれなりの紙幅が与えられている。それにもかかわらず、木庭の「梗概」を読んでも『霊界物語』の全体を理解できるわけではない。原文を読んでいない人には、それがどういう物語なのか理解できない部分が多いだろうと思われる。筆者自身、物語の原文を読んだ後で該当する「梗概」を読んでみると、かなりの違和感を覚えたのである。木庭は、物語について熟知しているのだろうが、自ら特定の筋に即してまとめ上げる方向に努力しているようには見えない。それは、木庭が要約という作業を軽視しているのではなく、『霊界物語』を絶対の神話として受け止めようとしているためだと思われる。

木庭の記述のわかりにくさは、木庭が『霊界物語』を自分の理解に即して再構成するのではなく、客観的に重要と思われる部分を抄録しようとしたためなのではないだろうか。だが、抄録という行為そのものに、そういう客観性と相容れないものがある。また、木庭自身が、人名や地名が『霊界物語』の中でどのような役割をもっているか熟知していたと思われるため、そうした知識の少ない読者には理解しにくい説明になっていることもあろう。しかし、こうした欠点にも見える特徴は、木庭にとっては問題ではなかったのかもしれない。木庭は、「梗概」を『霊界物語』から独立して読めるものとして作るつもりはなかったのではないか。むしろ、木庭が読んでほしいのは『霊界物語』そのものであり、「梗概」はその際に、折に触れ参照するためのものでしかなかった、と考えるべきであろう。「梗概」が独立して読めるとすれば、それは『霊界物語』の否定につながるからである。そういう意味で、一読すると不思議に思える木庭の「梗概」は、作成者の意図に即したものと捉えるべきなのかもしれない。

飯塚弘明は、出口王仁三郎について活発な研究、普及活動を展開している。はじめ、文章の発表の場はインターネット上が主であったようだが、現在では印刷物での著述も行なっている。著書『超訳 霊界物語』（太陽出版、二〇一三年）は、その題名から想像されるような『霊界物語』の現代語訳ではない。むしろ、『霊界物語』の内容と思想を解説するものである。飯塚は、ここで『霊界物語』の内容を要約したり、筋を追って説明することはできないと述べている。だが、飯塚は『霊界物語』全体を要約する試みを行なっていないわけではない。註（4）で示した『霊界物語入門ガイド』の前半で

は大本教に関する重要な人名、地名、出来事、概念などを解説しているが、後半は全巻の要約に当てられている。しかし、この要約だけを読んでも、『霊界物語』がどういう物語であるか、出口王仁三郎が何を伝えたいのか理解するのは難しいだろう。おそらく飯塚自身もそのことを認識しているから、『霊界物語』を解説するにあたって、内容の要約ではなく、問題別の概説的な記述に頼ることにしたのであろう。

『霊界物語』そのものの内容について語ることは、困難な行為なのである。

4 『霊界物語』第二十八巻の位置

さて、本稿が主として取り扱う『霊界物語』第二十八巻は、「海洋万里」の卯の巻である。第二十五巻から第二十六巻までは、オーストラリアを舞台に「高姫」が活躍する物語で、展開の流れを絞りにくいところはあるにしても、ある程度の話の連続は読み取れる。ところが、第二十八巻から突然、舞台が台湾に移り、登場人物もすっかり入れ替わる。つまり、太古の台湾を舞台に繰り広げられる、独立した神々の物語となるのである。物語の展開すら追い切れない自由奔放な展開は『霊界物語』の各所に見られることで、例外的なものではない。この巻は「台湾物語」とも呼ぶべき内容であり、全体とは相対的に独立した内容をもっている。[6]

台湾を舞台とする物語は第三篇で終わり、最後の第四篇「南米探検」は舞台が南米大陸に変わり、再び「高姫」が登場してくる。この何の脈絡もないように見える台湾から南米大陸へという展開にも、大本の神話の中では特殊な意味づけが行なわれている。

大本の思想の一つとして「型」あるいは「原型」という考えがあることはよく知られている。『大本のおしえ』は大本の教団が、自らの信仰をまとめた文献である。[7] この中の「Ⅶ神の経綸」「3、型の大本」では、出口なおの次のような「神諭」を引いて説明している。「世界へ、善と悪とのかがみを出す、大本であるぞよ。いままでは、日本だけのことでありたが、これからは、世界のかがみになる大本にいたすぞよ」(明治三十二年九月十九日)、「この大本にありたことは、みな世界にあるから、この中にしておることが、世界の型になるのであるから」(大正五年旧十一月)。大本の内部で起きたことは、日本で起きることの「原型」であり、日本で起きたことは世界で起きることの「原型」である、という考え方である。この考え方は、大本で起きたさまざまな出来事と日本や世界で起きた出来事を結びつけて説明するのに使われる。それは、「大本神諭」の言葉の解釈などにも利用されることがある。ただし、この「原型」と現実化した出来事の関係は

厳密なものではなく、通常の論理からすれば、かなり恣意的な解釈がなされているように思われる。二つの出来事の間にどのような照応関係があれば、「型」と現実化の関係にあるのかという説明はない。そのため、この「原型」と結果の結びつきは恣意的なものに思えてしまう。このような見方によって、大本教弾圧と日本の敗戦を結びつけて語られることはよくあるようだ。もちろん、それを信じる人にとっては必然なのだろうが、一般の人にとってはこの二つに特定の因果関係があるようには思えないだろう。また、この結びつきが教団によって歴史的な真実として決定されているわけではないから、あまり具体的に規定することは難しい。

この「型」の思想は、時間的に異なる二つの現象の一方が「原型」、一方がその「型」による再現となると考えられるが、それに対しこれとは別に、もう一つ、地理的な水準での「型」の論理が存在する。それは、日本列島を構成する本州以下の島が世界の「原型」ないし「胞胎」である、という考え方である。

第六巻第五篇「一霊四魂」「第二十五章金勝要大神」は、「豊葦原の瑞穂国」の創世を語る章であるが、そこには以下のような記述がある。

ここに天の御柱の神、国の御柱の神は、伊予の二名の島を生み、真澄姫神をして、これが国魂の神たらしめたまふ。之を愛媛という。一名竜宮島ともいひ、現今の豪洲大陸なり。而して我が四国は、その胞衣にぞありける。

以下同様に、他の四つの大陸が生まれる。すなわち、「筑紫の島」が生まれ、純世姫神が守り神、「筑紫の島」とは現代の亜弗利加大陸、つまりアフリカで、九州が「胞衣」。「蝦夷の島」が生まれ、言霊姫が守り神、「蝦夷の島」は現代の北米大陸。「高砂の島」が生まれ、竜世姫が守り神、「高砂の島」とは台湾島のことで、現代の南米大陸である。最後に「葦原の瑞穂国」が生まれ、高照姫が守り神、「葦原の瑞穂国」とは欧亜大陸、つまりユーラシア大陸であり、その「胞衣」は「大和の国」とある。大和の国とは本州を指すと考えられる。台湾は、南アメリカの「胞衣」であるとされている。

この五柱の神は「国魂」として、永遠に国土を守護するものであるとされるが、「但しこれは霊界における御守護にして、現界の守護ならざることは勿論なり」と説明されている。

また、この神々は現、幽、神の三界に出現するものであり、またこの五柱を総称して「金勝要神」という、と述べられている。「金勝要神」は大本の神々の中で重要な神であり、この説明が、すべての場面におけるこの神の性格を表わしているとはいえないが、その重要性を示すものではある。

この「胞衣」の理論も、それも二つの地域の関連性を説いてはいるものの、それがどのような論理で貫かれているのかは、かならずしも明確ではない。もちろん、直感的に気づくように、形が似ているというきわめて表面的な対応関係が見いだされる。「海洋万里」がこの「胞衣」の考え方を背景にしていることは確かで、最初の三巻はオーストラリアに関連があり、ついで第二十八巻が台湾、さらに第二十八巻四篇以降が南アメリカを舞台としている。台湾と南米は、「胞衣」の考え方から選ばれているように思える。しかし、オーストラリアが特別の関係があるようには思えない。むしろ、「海洋万里」という物語の設定に従って、海で結ばれた場所が使われているということしか、理解できない。「胞衣」とその拡大版である二つの地域で類似性のある物語が語られているわけではない。むしろ、地域の関連以外に相互に関係がなく、読者を苦しめる『霊界物語』のストーリー展開の奔放さは、ここでも遺憾なく発揮されている。

5　『霊界物語』第二十八巻の前史部分

「海洋万里」のはじめの第二十五巻から第二十七巻までの三巻は、オーストラリアを舞台にしているが、実はそれはその前の「如意宝珠」から続いている。しかし、第二十八巻で舞台は台湾に変わり、その間に物語の展開上のつながりはないように思える。また、この巻は、途中で琉球の物語が入るが、それは台湾の神々の争いを安定に導くための挿話であり、全体としては台湾を舞台とする神々の物語として、一連の展開で構成されている。

『霊界物語』で台湾について語られるのは、第二十八巻が最初ではない。第二十八巻の物語の前史ともいうべき内容は、第三巻「霊主体従」寅の巻で記述されている。『霊界物語』全体の展開、構成を見極めることは難しいのだが、一方では全体の関連がまったく無視されているわけではなく、思いがけない部分が関連を持っているのである。

「霊主体従」寅の巻第一篇「新高山」、第二章「神々の配置」および第三章「渓間の悲劇」では、次のような神話が語られている。この付近の記述は『霊界物語』の中でも、重要な記述の多い部分であるが、ここでは、台湾に関連する記述だけを簡略に紹介しておこう。日天使国治立命（にってんしくにのはたちのみこと）が十二の玉を世界各所に配置し、「国魂の神」とした。台湾の場合、新高山（現在の台湾の最高峰玉山のこと）には青色の玉を鎮めて、高国別（たかくにわけ）、高国姫（たかくにひめ）をその守護とした。さらに八王を主権者として配置して、新高山には花森彦（はなもりひこ）を配した。「八王八頭」の体制である。第二章の末尾では、八王八頭はいずれも「至善至美」の存在であったが、「八頭八尾の悪竜と金毛九尾の悪狐、

六面八臂の悪鬼の邪霊のために」「世はますます混濁し、つひには国治立命御退隠のやむを得ざるに致」る、と予告されている。そして、その最初に語られるのが第三章における、新高山の出来事なのである。

新高山は花森彦が天使となり、高国別、高国姫が治めていたが、高国姫の侍者玉手姫は悪の一味であり、二人に取り入り、寵愛される。天使花森彦は、玉手姫が悪であることを二人に告げるが、二人は納得せず、高国姫は憤慨のあまり「上天」してしまう。

ここで、花森彦と高国別は対立し、高国別は玉手姫と再婚する。『霊界物語』では一夫一婦が「天地律法の精神」とされており、再婚も容易には肯定されない。したがって、この再婚という行為が玉手姫の悪の一つとされる。高国別は天使長「大八洲彦」に花森彦の不当を訴えるが、大八洲彦の使いである言霊別命に高国別の天則違反を指摘される。しかし、高国別が納得しないので、青色の玉を取り出して、その光で玉手姫を照らすと、玉手姫は悪孤としての正体を現し、西天へ飛び去る。これによって高国別も玉手姫の悪なることを知る。だが、高国別は罪を問われないこととなり、その地位を維持する。これで事件は決着する。ところが、章末には次のように記述されている。悪の中心である常世姫一派の力は高国別をおとしいれ、その地位を蒙古別に代わらせ、高砂島は常世姫の勢力が支配するところとなる。天使花森彦は新高山の西南方に押し込められてしまった。「されど花森彦の至粋至純の霊魂は永く本嶋にとどまり、青色の玉とともにこの島に永久に隠されにける。花森彦の子孫も今に儼存して勇猛義烈の神民となり、神の御魂を維持しつつ弥勒神政の出現を鶴首して霊を研きて待ちおれりといふ」。

こうした出来事を知っておけば、第二十八巻の物語のはじめの部分は理解しやすくなる。

6 『霊界物語』第二十八巻の内容

先に『霊界物語』の内容を要約したものとして、木庭次守が作成した「霊界物語 梗概」があることを紹介した。ここでは、その第二十八巻の記述に従って、その内容を記述する。ただし、木庭の文章自体かなりの分量があるので、だいたいの区切りは木庭の施した節立てを残しつつ、さらにそれを要約する。なお、〔 〕内は筆者の補註である。

①舞台は、三十五万年前の台湾である。台湾は南米の「胞衣」であるとされている。ここで教権は真道彦命、政権は花森彦の系列にそれぞれ委ねられている。花森彦の長子アークス王は、玉手姫の怨霊のため、昇天したの

で、その子カールスが王になり、王妃には従姉妹のヤーチン姫が予定されていた。

このときの宰相はサアルボースといい、高国別と玉手姫〔「体主霊従」寅の巻に出る悪神〕の子供である。彼はカールス王に代わって王位に就こうとしたが、花森彦の系列を退位させて自分が王になることは国民の認めるところではないと知り、王妃にヤーチン姫ではなく、自分の娘セールス姫を据え、自らは外戚として政権を握ろうとした。

王妃になる予定のヤーチン姫は、セールス姫の使う悪霊〔狐〕のために、病気になる。セールス姫は従者マリヤス姫を伴い、ヤーチン姫を見舞う。病気のヤーチン姫は、〔セールス姫を悪狐であるといい〕セールス姫の髪をつかんで乱暴を行なう。帰宅したセールス姫は、その出来事を父サアルボースとその弟ホーロケースに報告する。そして、従者マリヤス姫を、セールス姫に助力しないといって責める。マリヤス姫は自分はアークス王の落胤であると明かし、サアルボース、ホーロケースを池に投げ入れて、玉藻山〔日月潭の周辺にある山の名〕に去る。

病気のヤーチン姫のところにセールス姫の副守護神〔人の持つ悪心の霊のこと〕の金狐の霊が化けて出てきて、毒の瓜を与える。ヤーチン姫の従者ユリコ姫はこれを見破る。ユリコ姫とキールスタンは三五教（あなないきょう）〔古代で大本教に当たる宗教の名称〕の神に祈り、その神徳でヤーチン姫は病気が全快する。

カールス王はヤーチン姫を見舞うが、〔その衰えた容色を見て〕ヤーチン姫に失望する。王の散歩中に、空中より元気なヤーチン姫が姿を見せる〔これはカールス王の自殺を防ぐため〕。セールス姫の悪霊金狐が化現したものである。翌日、全快したヤーチン姫がカールス王に面会に来るが、サアルボース、ホーロケースはこのヤーチン姫は邪神の化身だと主張し、姫を縛り上げて、急流に投げ込む。

②真道彦は、玉藻山に三五教の聖場を築き、新高山の南を教化していた。ホーロケースはこの地を奪って、第二の王国とするため、攻撃し、真道彦命を刺す。真道彦は木の花姫（このはなひめ）の化身に救われ、二三の従者とアーリス山の川ぞいに隠れる。そこへ、ヤーチン姫が流されて来たので、ヤーチン姫、キーリスタン、ユリコ姫を救い、玉藻山へ帰る。

玉藻山では日楯（ひたて）・月鉾（つきほこ）〔真道彦の息子〕が三五教の聖地を回復していた。玉藻山はヤーチン姫を上に置き、日

潭〔日月潭の半分〕は日楯がユリコ姫を妻として治め、月潭はマリヤス姫を神司として月鉾が仕えた。

ヤーチン姫は真道彦をカールス王と思い込み、愛したが、やがって事実を認めて、恋をとどめた。マリヤス姫は月鉾を愛したため、月鉾は迷惑であった〔マリヤス姫は月鉾を思うため、神業がおろそかになったことがある〕。

こうして、玉藻山は三五教の聖地として安定したのである。

③一方、北の泰安では、カールス王は蟄居させられており、セールス姫が女王として、新高山より北の政権を握り、バラモン教主を兼ねた〔悪の宗教をバラモン教と呼ぶが、インド古代宗教のバラモン教とは別のものである〕。サアルボースが宰相、ホーロケースが副宰相となった。また、セール姫は〔ホーロケースの息子の〕セウルスチンと関係を結び、そのためセウルスチンが暴政を行なった。そのため、泰安では混乱が生じていた。

④泰安城の混乱に対し、シャーカルタン一派とトロレンス一派が東西から攻撃を始め、それが玉藻山にも伝えられた。玉藻山では協議の結果、幹部の決議で泰安城を攻めることになる。ただし、この決議は誤ったものであり、真道彦命の考えには反していた、真道彦命は心ならずも、この決議に従うことになった。

第一陣はテールスタンで、カールス王を救出し、泰安城を攻撃した。シャーカルタンは、泰安城のサアルボース軍とテールスタン軍に挟撃され、敗走する。そこへ、真道彦命が軍を三つに分け三方から攻撃したため、セールス姫、シヤーカルタン、テールスタンなどの軍はすべて敗走する結果となる〔テールスタンは三五教側であったが、ここではカールス王と結びついており、三五教の真道彦命側と戦うことになる〕。そのため、テールスタンは真道彦命を恨み、カールス王に讒言したため、カールス王は真道彦命を敵視するようになる。真道彦命は泰安城に入った後、カールス王を迎えるため使者を送るが〔カールス王に投獄され〕、一人も戻ってこなかった。そこで、みずからヤーチン姫とともに迎えに行くが、ともに囚われてしまう。

⑤聖地玉藻山では、この状況に対し、「琉球南島の神司照彦、照姫の救援を求めよ」という神示を得て、日楯、月鉾、ユリコ姫が南島へ渡る。そこで、大蛇の玉と鏡を得て、玉藻山に戻る。月鉾はテーリン姫と結婚した〔木

庭の記述はこのへんになると、非常に簡略になっている。それが、意図的なものか、紙幅の制限を意識したためなのかは、判然としない〕。

泰安城は政治が乱れたため、セールス姫、シャーカルタン、トロレンスに攻められて陥落、カールス王は囚われる。セールス姫が再び女王となり、セウルスチンが玉藻山を攻めるが、ユリコ姫らに鏡で照らされて、帰順した。

マリヤス姫は、泰安城に入り、日楯、月鉾とともに赤玉白玉の光でセールス姫一味を照らすと、金毛九尾の悪孤、その他の邪神となり、消滅した。

これにより、囚われていた全員が救出される。カールス王は大国治立尊〔大本教の中心的な神〕の祭典を行ない、真道彦尊を導師とし、三五教を国教とする。ヤーチン姫を妻とし、宰相にマールエース、副宰相にホールサースを挙用した。

また、カールス王は真道彦命の言葉に従い、南島の照彦に感謝を述べ、照彦は台湾を訪れて、琉球台湾、相携えて神業に奉仕することになった。

その後に、多くの人の婚姻が記述される。

第二十八巻の台湾物語の後には、第四篇「南米探検」が続いているが、これは『霊界物語』の多くで重要人物として登場する高姫の登場する物語であり、先にいった「胞衣」の原理による結びつきを除けば、ここまで紹介した物語と直接的な関係は見いだせない。

「梗概」の後に、木庭は各巻でその特徴を記述しているが、この巻では以下のようなものである。「三十五万年前の台湾島が神徳によって平和に治められた経緯をのべ、真道彦命は精神界の救世主であることを示されている」。

だが、この「平和」は永久のものでもなければ、他の地域へ広がっていくものでもない。ある地域のある時点での出来事でしかない。『霊界物語』では、正しい信仰が勝利しても、それは人々の心の緩みとともに、ふたたび混乱に陥っていく話がたびたび登場する。また、三十五万年前に台湾で成立した理想状態が、その後続いているわけではないことは、だれにも明らかである。ここでも、物語は現実との直接的な対応させることはできず、一つの想像上の空間として相対的に独立する。

上記の「梗概」、正確には「梗概」の要約を読んで、第二十八巻の内容が理解できるのだろうか。筆者自身は、第二十八巻を何度か読んでいる。だが、自分ではその内容をうまく「梗概」にまとめる自信は持てなかった。だから、木庭の「梗概」を紹介しようと考えたのだ。実のところ、第二十八

巻の本文だけでなく、木庭の「梗概」も何度か読んだ。しかし、木庭の「梗概」を読んで、これが、第二十八巻の内容を的確に要約したものであるのか、判断できなかった。結局は、こういう筋なのかもしれない。しかし、省かれてしまった部分と、採用された部分の選択基準がよくわからなかった。重要性の低い部分が取り込まれている一方で、高い部分が省かれているようにも思えた。たとえば、冒頭でカールス王は実権を失い、サアルホース以下がバラモン教による悪政を行なっていることは、根本的に重要な事実ではないだろうか。

文章を要約する場合には、特定の視点ないし関心が設定される。その視点なり関心から、原文の内容を評価し、重要性の高いほうから選択し、低い部分を捨て去る。そして、それらを再構成していくことになる。つまり、これは解釈や翻訳に似た行為なのである。では、木庭はどのような尺度を設定して、『霊界物語』を選択し、再構成しようとしたのか。木庭が自分で尺度を設定し、それによって『霊界物語』の文章を取捨選択したとは思えない。木庭が『霊界物語』に向き合う態度は、信者に求められる「拝読」と呼ばれるものであったといえるだろう。それは対象を評価するのではなく、そのまま承認することであろう。

本居宣長は、『古事記』を読解するとき、その記述が事実であることを前提にした。常識的に納得できないことは、それゆえにかえって真実だと認められる、と書いている。事実でなければ、信じがたいこと、本文が事実であることを疑わしく思われるようなことをわざわざ作為して記述するはずはないというのである。しかし、宣長は『古事記』の文章をそのまま受け入れるという態度から、その文意を理解するために註釈を作成する。その理解を通して、宣長は自ら古事記の思想を形成していく。『古事記伝』を書くことは、たんに対象を理解するだけではなく、宣長の自らの思想形成でもあった。[8] これは、註釈という行為に必然的に伴うものである。だが、木庭は宣長のような方法をとってはいないように思われる。そもそも、宣長の前にはテキストしかなかったのに、木庭の前には『霊界物語』を書いた王仁三郎が存在した。だから、『霊界物語』という神話の文章を要約して語る必要はなかったのだろう。木庭自身には、王仁三郎とは違う思想を作る意図がなかっただけでなく、王仁三郎の思想の正しい解釈を自ら主張しようとする意図もなかった。彼は、ただ忠実に要約しようとしたのだろう。だが、特定の解釈や評価をもたないかぎり、要約することは不可能である。木庭の「梗概」はそういう意味で、独立した記述としては根本的な困難を抱え込んでいるように見える。だが、それも木庭にとっては当然のことだったのかもしれない。というのも、木庭は自らの「梗概」を独立した文章として作成する意図はなかったのだ

ろう。木庭は「梗概」を、『霊界物語』の内容を圧縮して示すために作ったのではなく、膨大な『霊界物語』を拝読することへの一つの契機になれば十分だったのかもしれない。つまり、「梗概」は、あくまでも『霊界物語』自体を読むための補助となればよいのであって、原本を拝読することを後押しすることが木庭の願いであったと考えるべきであろう。木庭の「梗概」は、本文を参照しなければ、そもそも理解できない文章群なのである。

木庭以外にも、「海洋万里」第二十八巻の要約の試みは存在する。それが、大本と王仁三郎を主題としたサイト「うろー」の「28巻台湾物語を読む」である。このサイトは、運営者が狭依彦という名称で、その内容は大本の研究としてきわめて充実したものである。[9]

この論考のはじめに、以下のように記されている。

> この論考は物語28巻を1度読んでから、目を通していただくとよいと思います。はじめての方は、何がなんだか分からず、読後感は、つまらない男女の恋の鞘当と感じられるかも知れません。しかし、この論考から、この28巻の理解しがたいカオスの奥に秘められた謎。まさにミステリー。物語の深さ・面白さを感じられると思います。

霊界物語28巻は1章から18章までは、独立した高砂島（台湾島）物語となっています。このためこの部分だけ読んでも、予備知識なしに読めるかもしれません。また、残りの19章から22章までは高姫物語の続きです。

台湾物語は、紆余曲折の後に、台湾を支配していたバラモン教を三五教が教化する話です。政治的な、対立、妥協、合同などの話と、男女の恋愛関係がもつれつつ展開します。

この巻の特徴は、登場人物が多く、名前がカタカナで書かれていること。物語の中でも最も登場人物が多いといえるでしょう。登場人物の属するグループが大別して4つあり、これらが複雑にからみ合います。

狭依彦の要約もかなりの分量であり、本文の部分だけで一万字に近い。文字以外に、多くの図示もなされており、解説も詳しい（以下のアドレスで読むことができるので、ここにその記述を引用することは控える。http://uro.sblog.jp/modules/tinyd14/content/index.php?id=1）。したがって、物語の内容をある程度詳しく知ることができる。真道彦命（あなないきょう）の陣営の第一陣として泰安城を攻めるテールスタンは三五教

でありながら、一時は、三五教同士で対立することになったという点も説明されており、木庭の「梗概」では省かれていた内容を知ることができる。しかし、それにもかかわらず、狭依彦の要約も、自ら「はじめての方は、何がなんだか分からず、読後感は、つまらない男女の恋の鞘当と感じられるかも知れません」と書いているように、要約の成否についての懸念を払拭できないままなのである。木庭の「梗概」ではほとんど省略されている男女関係のもつれを、狭依彦はかなり拾っており、それによって生じる物語の曲折にも触れている。月鉾をめぐるマリヤス姫、テーリン姫の三角関係、ユリコ姫の活躍などもかなり詳しく記述されている。しかし、一方で、狭依彦自身が認めているように、台湾の物語は他の部分からはかなり独立性の強いものであるにもかかわらず、その部分の理解は容易ではないのである。「登場人物が多く、名前がカタカナで書かれていること。物語の中でも最も登場人物が多いといえるでしょう」。そのため、「つまらない男女の恋の鞘当」ばかりが目に付き、全体の理解は混乱してしまうことになりかねない。

だが、一方、狭依彦は台湾物語を理解するために有効な見取り図を描こうとしている。その枠組みが「グループが大別して4つ」あるということである。この「4つ」とは、カールス王のグループ、真道彦のグループ、セールス姫らのグループ、そして、シャーカルタンとトロレンスの民軍と呼ばれるグループである。そこから、台湾物語を、この四つのグループが対立し、最初の二つのグループが勝利し、安定した体制を作るための物語だとまとめることができる。男女関係のもつれが、幾組も語られたり、悪霊の化身が突然出現して、物語の展開を複雑にしたり、見えにくくしたりするのである。基本的に正しい人々（神々）のグループ内においても男女関係に基づく、関係のもつれが生じることがある。しかし、狭依彦は四つのグループの対立と捉え、さらに三五教とバラモン教の対立という枠組みも提出している。

また、狭依彦は物語を要約した後に、さらにその内容にいろいろ考察を加え、最後に以下のように書いている。

11. 疑問点

（中略）

(3) 王仁三郎の考えを推測する

最後に真道彦命が次のように言っています。

「吾々は国治立尊の御退隠以前より、専ら神政に仕え、現界の政治に容喙せざるをもって天職としている。カールス王は花森彦命の末裔で、この島国を治める祖先よりの使命があるので、元の王位に着き、ヤーチン姫を王妃

として君臨してほしい。また、マールエースとホールサースを宰相、副宰相となし、数多の罪人を許し、シャーカルタンとトロレンスを重用すれば、天下は太平となるだろう」

これから見ると、王仁三郎の思想は下記のように考えられないでしょうか

●政治をすべき血筋が決まっている　天皇制容認　政治の主宰者として

●神政に仕えるものは現実の政治に容喙せざるをもって天職としている　天皇と神とは別だ

●共産主義者に対して反対はしていない

狭依彦のこれらの試みを見ると、『霊界物語』を読む姿勢が、木庭の場合とはかなり違っていることに気づく。木庭が『霊界物語』を読んで、それをそのまま受け入れることを基本においているのに対し、狭依彦は『霊界物語』を理解し、そこから何らかの中心的な要素を読み取ろうとしているといえる。ただし、狭依彦は客観的に、あるいは学問的に王仁三郎の思想を分析することを目的としているわけではない。狭依彦の解説の中には「予言」という語がたびたび登場する。狭依彦は王仁三郎の言葉が、その後の事実の中に実現している、ないしは予測していると考えているようである。そこには、宗教的な文献、信仰上の問題として『霊界物語』を読むという性格を読み取ることができる。そして、そういう姿勢がおそらく、『霊界物語』の思想としての主張を抽出するだけの方向へ向かわせない要素になっているだろう。『霊界物語』の神話から教義を抽出することは、あまり実り多い仕事ではない。幕末以降に発生した日本の新宗教は、あまり教義的に展開しない。神道そのものが、儀式に比重がかかり、教義的に発展しない傾向のある信仰ではあるが、それでも近世の神道はかなり教義的に展開する。しかし、新宗教は総じて神話は説くものの、教義的には展開しない。それは、天理教や金光教にもいえることだが、大本教ではとくに特徴的なことではないかと思われる。

そこで、『霊界物語』の読者の関心も、往々にして、大本の教義よりも、王仁三郎の言葉の中に予言的なものを見いだし、それがどのように表現されているか、に向かう場合が多い。そのためには、歴史的な文脈と王仁三郎との文章や言葉との照合が行なわれる。当然、その前提として、予言というものが成立するという仮定（あるいは断定）が存在する。これは木庭の関心とは、本質的に異なっているだろう。木庭にとっては、おそらく予言は付随的なものでしかない。王仁三

郎と同時代を生きた木庭にとって、今の信仰が重要であり、歴史的な出来事とそれに対応する予言を見いだすことを最重要なこととは考えないであろう。あるいは、政治的な文脈での解釈にもそれほど興味はないのかもしれない。

木庭は、王仁三郎の近くに永く生活し、王仁三郎の言葉を直接、間接に聞いてきた。後に、彼がそれをまとめたものが『新月の光』である。そこに、第二十八巻に関連した言葉がいくつか見つけられる。よく注目されるのが、王仁三郎の暗号解読的な示唆である。サアルボースが西園寺公望であるとか、トロレンスはトロツキーとレーニンとスターリンを合わせたものだという言葉が存在する。こうした発言を過度に重視すると、『霊界物語』を予言の書と捉え、物語の暗号解読的な読解に向かうことになりやすい。だが、この種の発言を重視し、それを理解の根拠としていくと、政治や社会についての予言の書として物語を解読することになる。しかし、こうした発言は断片的なものに過ぎないし、王仁三郎は質問を行なった人、その場面の流れなどに対応して、さまざまな物言いをしている可能性がある。そもそも、そういう解釈は、その時代ごとに関心をもたれた社会情勢や大きな事件と物語の内容をいろいろに恣意的に関連づけていくことにつながる。そうした関連づけは、さまざまな出来事が起こるたびに、あらたに別の関連を生み出すことになる。ということは、固定した最終的な解釈が存在するわけではない、ということになる。

あらためて思えば、『霊界物語』は、その内容に即して忠実に読もうとすると単純に要約することができないことが、その基本的な性格に結びついている、と考えることが重要になるだろう。要約に還元することは物語そのものの否定になるのではないか。物語の内容は要約からあふれ出すのではないか。

7 『霊界物語』第二十八巻と現実の台湾

第二十八巻に登場する台湾が、現実の台湾とどのように関連しているかも検討しておかなければいけない問題である。

台湾が日本の一部であり、それが「高砂島」、後の南米大陸の「胞衣」であるという主張は、当時、日本が台湾を領土の一部としていたことが前提になっている。日清戦争の結果、一八九五年（明治二十八）四月に下関講和条約が結ばれた。これにより、台湾は日本の領土となった。それ以降、第二次世界大戦で日本が敗北する一九四五年（昭和二十）八月まで、台湾は日本の一部として存在した。王仁三郎が生まれたのは一八七一年（明治四）で、『霊界物語』が書かれたのが一九二一年（大正十）であるから、王仁三郎にとっても、想定される読者にとっても、台湾は日本だったのである。

当然、大本教も台湾へ布教を行なっている。ここで、先行

研究によって、大本教の台湾布教を簡単に説明しておこう。[10]

一九一九年（大正八）十一月二十八日から十二月にかけて、大本教の信者三人が台湾に渡り、大本教の布教を試みた。その中には最重要の幹部だった浅野和三郎が含まれていた。彼は東京帝国大学を卒業し、海軍学校の教師だった人物で、当時は大本教で王仁三郎に次ぐ重要な人物であった（他の二人は岩田久太郎、高木鉄雄）。彼らの布教は台湾の日本人社会にかなり強い衝撃を与えた。さらに、翌年の三月にも四名の布教団が台湾で活動しており、さらに七月には島田の布教が行なわれている。布教にあたった人々は、当時の大本内で盛んであった「立て直し」（世界の全面的な変革）の到来を鼓吹した。台湾では「神がかり」になる民俗信仰が盛んであったこともあり、台湾の当局は大本教の影響に危機感を持った。台湾国内で大本教を禁止し、本国の内務省へも報告し、その取り締まりを求めた。これが、第一次の大本教への弾圧の一つの契機になったのではないかともいわれている。彼らの布教活動がこれだけの反響、反発を呼び、教団の活動にも影響が考えられたとすれば、それは王仁三郎へ伝わったはずである。それにともない、台湾の各地の社会状況、布教の状態なども報告されたのではあるまいか。

大本教はこの後、第一次の弾圧を受け、布教は停止された。王仁三郎が『霊界物語』の執筆を始めるのはその後のことである。王仁三郎が台湾を最初に訪れるのは、一九二七年（昭和二）十二月のことである。したがって、王仁三郎が自らの体験を物語の内容に反映させることはできなかった（その後、王仁三郎は三回、台湾を訪れているし、妻の澄、娘婿の日出麿（ひでまる）も出かけている）。

第二十八巻の台湾に関する記述を読んでも、王仁三郎が知っていたはずの台湾に関する知識や情報はまったく利用されてはいない。たとえば、台湾中部の湖である日月潭は重要な役割をもって登場している。日月潭は台湾を代表する湖で、有名な観光地であった。一九二三年の布教団も訪れているし、王仁三郎も一九二七年に訪れている。ところが、第二十八巻で登場する日月潭は、島や山があることはわかるが、その地形的な特質や、その光景はまったく描写されてはいない。つまり、日月潭は観光案内の情報どころか、ほとんど地形の略図程度の情報しか利用されていないのである。北部の港湾都市で日本とを結ぶ航路として使われていた基隆と思われる場所キールが登場しているが、それも地名以上に具体性のある光景は描かれることはない。

筆者は、台湾の台中に一年間住んだことがあり、その間、台湾のさまざま場所を訪れた。もちろん、台湾は大正末期とは大きく姿を変えているから、当時の光景をそのまま見ることはできない。[11] しかし、台湾では日本統治時代の建物や公共

施設がいくつも残されている。そういうものも、『霊界物語』の記述にはまったく登場しない。もちろん台湾物語の時代は三十五万年前という設定だから、王仁三郎の時代の文物が登場するはずはない。しかし、熱帯、ないし亜熱帯らしい特徴的な風物もまったく出現しない。台湾は完全に抽象的な存在で、台湾がなぜ舞台でなければならなかったのか、まったく理解できない。自然も人々もまったく現実性がない。第二十八巻に登場する人々（神々）は全員、日本語を話しているようである。その人々のやりとりにも、台湾らしい特徴はまったく存在しない。台湾だけではなく、琉球の南島も登場するが、これもまた抽象的な場面設定としてしか、機能していない。琉球そのものへの関心は見いだすことができない。

この具体性の欠如は、第二十八巻の物語をひどく現実性のないものにしている。だが、これは台湾や琉球だけの問題ではない。『霊界物語』は、たとえ地名が出てきても、現実の土地との結びつきは希薄だ（「入蒙記」はやや特殊だが）。霊界の物語だからといえばそれまでだが、それならば具体的な地名は不必要ではないのか。『霊界物語』の読みにくさの一つの原因は、こうした具体性の少なさにも関係があるだろう。そういえば、第二十八巻は登場人物のかなりの名前がカタカナ表記になっているため、どういう人物なのか、想像が湧きにくい。一方、日本語の名前も一様ではなく、「ユリコ姫」のように近代的な名前と姫を結合したものがあるかと思えば、「真道彦神」のように古代の神話の神の名前に倣ったと思われるものがある。こういう異種の名前の混用は、物語から具体性を失わせ、読者を一種宙づりにする。

『霊界物語』を読み進めていると忘れてしまうこともあるが、それは、この物語が王仁三郎が高熊山で修行中に見た霊界の出来事をそのまま記述したものという枠組みを持っていることである。いくつかの巻の最後、ないし途中で、王仁三郎が霊界の観察から目覚めると高熊山の山中にいることに気づくという記述が何度か出現する。読者はそういう記述に出くわすと、この物語の基本的な枠組みを改めて想起することになる。先に述べたように、『霊界物語』には高熊山修行とは関係のない内容もかなり含まれているから、この前提はあくまでも建前的なものでしかない。だが、その前提のために、物語の舞台や時代の設定は、現実とは直接対応することを求められないことになる。あるいは、『霊界物語』の現実との対応は表面的なもので、むしろ宙づりになっていることは意図的な設定なのだろうとも考えられる。

その結果、『霊界物語』には、一種作り物めいた雰囲気が伴う。それはジオラマや箱庭が持つ、いかにも人為的な作り物という雰囲気に似通っている。その結果、読者は『霊界物語』を荒唐無稽な作り物のように受け止めることになる。そ

ういう事態は、王仁三郎自身も気づいていたに違いない。なぜなら、王仁三郎も『霊界物語』は自分の創作ではなく、高熊山修行中に見たままの光景を描いていると書いているからだ。逆にいえば、このことを強調する必要があったということである。だが、高熊山の修行期間は三月一日から一週間のことであり、その間に瞑想中に感得したものが『霊界物語』全巻を満たすほどの量に及んだとは、常識的には考えにくい。また、それを四半世紀を隔てて記録するというのも、高熊山の修行の直接的な記録であることに疑いを抱かせる（もちろん、信仰している人たちには別の話だが）。異界に連れ込まれた人が、異界で見聞きしたことを語ったという話は数多く存在するが、そういう記録は基本的には自らの経験の報告であり、『霊界物語』とはまったく性格が異なっている。

8　王仁三郎の宗教体験と現実

第二十八巻を中心に『霊界物語』の特質を考えてきたが、ここではそれを手がかりにして、王仁三郎の思想全体を考える視点を見いだしていきたい。ただし、ここで提出するのは、あくまでも可能な論点の検討であって、その論点から展開すべき議論そのものではない。

大本の信仰の中で、綾部や亀岡をはじめ、何カ所か特別な意味、役割を与えられた場所は存在する。しかし、二つの聖地を起点としてすべての場所の意味が説明されているわけではなく、意味を持つ場所はきわめて限定されている。こうした地理的な狭さは、実は日本の神信仰においては特殊なものではない。中世には神や神社などの成立を語る「縁起」と呼ばれる神話的な文章が多く書かれたが、そうした神話の中には自らの信仰圏の成立している地域にしか関心がないものが多い。自らの影響力の及ぶ狭い生活圏を背景として成立している神話である。

これに対し、大本は、近代の宗教であり、その認識している世界は広い。綾部の貧しい主婦であった出口なおですら、息子を日露戦争にとられ、失っている。なおは、それゆえ、自分の生活圏以外の世界の広がりを意識し、綾部を根拠として、世界全部を立て直そうと主張する。つまり、もはや自らの狭い生活圏の中だけで神話が成立するわけではない。たしかに、なおにおいても、綾部を中心とする狭い地域以外の空間は、現実感の弱いものだったかもしれない。しかし、それは綾部を中心に、彼女の知らない広い世界へつながってはいる。綾部から遠ざかるにつれて、その現実感は弱まっていくのだろうが、かといって、それはどこかで質的に断絶するわけではない。

ところが、『霊界物語』の舞台としているのは霊界であっ

て、現実の土地とは時間、空間の両者で切れている。もちろん、この世界との一定の関連は存在しており、この世と関係のない空間が設定されているわけではない。しかし、地理的な現実感は質的に異なっている。それは、先にいったように、現実をモデルにして作られた仮構の空間である。狭い世界しか知らなかったなおよりも、世界を知っているはずの王仁三郎のほうが、現実の世界とは別の空間に神の物語を繰り広げていることになる。王仁三郎は、現実と宗教的空間の連続性を確保できていないかのように思われる。

ここから思い出されることは、『霊界物語』が高熊山での一週間の修行中に得た霊界経験に基づいているということである。王仁三郎が自ら神と直接に接触した経験の原型は、このときの出来事なのである。大本は前期においては「鎮魂帰神法」という技法を用いていた。これは、神を降らせ、人に神を出現させる方法である。神がかかる神主（神官のことではない）とともに重要なのは、この出現した神がいかなるものであるか、善神であるか、悪神であるかを判定する役割を担う「審神者（さにわ）」であった。王仁三郎は「審神者」としての自己の役割を重視した。神主となって神を降臨させることよりも、その降りてきた神が正しい神であるか、あるいはどのような神であるかを判定することは、高度な能力を必要とするものであった。王仁三郎は自らが神がかりになり、その神の声を他者へ伝えるという位置を占めなかった。神がかりになって「筆先」を書くのは、なおの役割だったのである。

大本の中で、神がかりになって、神の言葉を筆記したと主張するのは、なおだけではない（なおの娘、澄の姉だった福島久子は、大本の中でたびたび混乱を起こす言動をした人物として記憶されている。彼女もまた、一時期、「筆先」を書いていた）。また、王仁三郎自身も『伊都能売神諭（いずのめしんゆ）』に収録された「神諭」を発表している。だが、これらの「神諭」のあるものは、なおの「神諭」と比較すると、はるかに概念を用いた説明的な内容である。また、短歌の形式をとっていたりするものもあるが、その表現も散文的な説明に置き換えることができるものである。つまり、こうした文章は、「神諭」であるよりも、王仁三郎の他の表現との共通した文体、内容のものといえる。なおの「神諭」は、なおの平生の人格とは異なるところから、その人格の殻を破って表現されるものであるといえようが、王仁三郎の「神諭」は、自分の平生の人格の統合は維持されたまま、意識的に生み出された文章であるといえよう。

王仁三郎は、なおや天理教の中山みきのような人々が神々に向かっていた姿勢や経験を持っていなかったのだと考えられる。そもそも「鎮魂帰神法」のような神道上の技法を活用して神と結びつこうとすることは、神との交流の体験に恵ま

れていなかったことを物語っているのではないか。神の言葉を語る人は、突然、神との交流に入る。そういう人々は、時には、そのような神の出現を拒否しようとすることさえある。しかし、それにもかかわらず、彼らは神に見込まれ、その言葉を語り続けることになる。

普通、出口王仁三郎といえば、神との交わりの深い人の代表と思われがちである。しかし、こう考えてくると、そのイメージにはある程度の修正が必要であることがわかる。少なくとも、王仁三郎の神に対する態度は、一般に新宗教の教祖、開祖といわれる人々の場合とは異なるものである。王仁三郎の宗教観は、なおの信仰のあり方と対立する要素もあり、また批判的な部分を抱え込みながらも、根底的にはなおの信仰の根本を肯定し、二つの中心として大本の教団を形成した。これは、王仁三郎に欠けているものが、なおに存在していたからであろう。

だが、王仁三郎には、こうしたなおの神体験のあり方とは別に、その欠如を補うものがあった。先に触れた「鎮魂帰神法」もその一つであり、また神話解釈の方法としての「言霊学」も加えることができる。王仁三郎の祖母宇能（うの）は言霊学者中村孝道の子で、その王仁三郎はその宇能に訓育された。[12] 一八九八年（明治三十一）には、静岡県の稲荷講社の長沢雄楯を訪れ、「鎮魂帰神法」を学んでいる。[13] 王仁三郎は、こうして本田親徳、長沢雄楯と連なる神秘主義的な神道のあり方を学んだのである。これによって、王仁三郎が高熊山で行なった「幽斎」の修行は、神道教説の伝統に裏打ちされたといえよう。[14]

さらに、王仁三郎の宗教を支えたものは、その神道全体に関する認識であったと思われる。王仁三郎は、多くの書物を読んでおり、当然、神道関連の知識を得ていただろう。また王仁三郎は、一九〇六年（明治三十九）、神官の養成機関である京都の皇典研究所に入っている。ここで王仁三郎は、神道についての知識をさらに学ぶとともに、神官の資格を得ている。このような神道全体についての知識は、初期のなおの教団に欠けていたものであり、教団内における王仁三郎の地位を認めさせるものであり、さらにはその後の大本の宗教を発展させる上でも重要な役割を果たした。たとえば、初期には王仁三郎自身の神格は小松林とされていたが、それは一般的な神道全体の枠組みの中では、あまりにも心許ない神であった。綾部の小集団の中では十分であった初期の神々の存在は、大本の発展とともに、より本格的な神々に転化していくことを求められた。

その中で、王仁三郎は自己の神格をスサノオの神に求めていく。一方では、教団全体も出雲の信仰への接近を行なう。一九〇一年（明治三十四）に、教団は出雲大社に参拝した。

大本ではこれを「出雲火の御用」と呼んでおり、出雲大社の神聖な火を受けたともいっている。大本教と出雲の神々とのつながりが強く意識されているのがわかる。これは綾部の近くに元出雲と呼ばれる場所が存在したことも一つの契機ではあろうが、当時の神道の思想的な課題との関連が重要な意味を持っている。

現在、日本の近代の神道は、一般には国家神道と呼ばれることが多い。国家神道の概念については、今も議論のあるところではあるが、伊勢神宮、天照大神、天皇という系列を中心にし、すべての神々をその下に位置づけるものである。こうした神道理解においては、祭政の一致が基本的な立場となる。つまり、神道とは天照大神を中心に置く神々の体系を想定している。しかし、こうした神道理解は、国家神道形成過程において成立してきたものであり、明治の初めから承認されていたものではない。平田篤胤がその著書『霊能真柱』で、大国主の国譲りの言葉について説明している部分をみてみよう。[15]

篤胤は、まず師の宣長の説を否定する。宣長は、スサノオの系列はこの世界にはいられないので、大国主命は国を譲って、黄泉の国へ行ったと説明する。しかし、篤胤は、イザナギがスサノオに海の国を支配せよと命じた言葉を、陸地を含む言葉であると説明し、この世界のすべてがスサノオに委ねられたと解釈している。そこで、大国主命は出雲の杵築の宮に鎮まっているが、それはこの世界をつねに守っていると理解する。篤胤は「顕明事」と「幽冥事」の二つの概念を持ちだし、「幽冥」は死の世界であり、死者はそこから「顕明」を見守っていると考える。そして、国譲りの誓言を、天照大神の子孫の系譜は「顕明」を、出雲の神は「幽冥」を司ることを定めたものだと説明する。篤胤は魂の行方として「幽冥」界を考えている。篤胤が求めているのは、魂の行方の解明であり、それによって心の平安を得ようとしている。こうした考えは明治の国家神道の指向するものとは、かなり異質である。篤胤が、神道を心の問題として捉えており、信仰の問題として捉えていることがわかる。

篤胤の時代には、天皇を中心に置くような政治体制は存在していない。だから、篤胤は「幽冥」と「顕明」が対立するような事態を想定する必要はない。『霊能真柱』の中でも、天皇がいて、将軍がいて、大名がいるという政治のあり方をといて、それを「幽冥」界の説明にも利用している。「幽冥」を重視するが、「顕明」が対立するというような問題は顕在化していない。

しかし、明治になって、「顕明界」の政治的支配が天照大神の直系の及ぶところとなると、神道の状況も変化する。国家神道形成期における伊勢派と出雲派の対立に見られるように、「幽冥界」の信仰は「顕明界」の祭政一致の優位によっ

て決着する。だが、その後の神道全体の動向は、篤胤の国学思想だけを延長することだけで成立するものではない。後の国体思想が、会沢正志斎の『新論』などの思想を受けて、「忠孝一本」などの観念を重視したように、国学以外の発想、指向にも支えられている。篤胤においては、「幽冥」の信仰は、「顕明」に従属しているわけではないのである。

出口なおが主張しているような現実世界への批判は、こうした「幽冥」の信仰と結びつく。現実の社会への批判は、明治においては「顕明」に対する「幽冥」からの批判となる。目前の現実に対して、あるべき現実、あるいは別の世界を主張することに結びつく。

『霊界物語』第二十八巻の記述でいえば、カールス王の政治と、真道彦の宗教が並び立つあり方が台湾物語の最終場面として描かれていることが考えあわされる。真道彦は、自らに政治的な権力をとることはしないと言明している。宗教が、政治に従属するのではなく、独自のあり方を維持することが、この世界の正しいあり方だといわれている。これが、王仁三郎の考えている「皇道」なのであろう。

大本は、長いあいだ「皇道大本」を名乗っていたこともあるし、『古事記』の神話を神聖視し、自己の宗教を「皇道」そのものであると主張したりもする。王仁三郎のこうした態度を、国家権力への従属ないし妥協だと批判的に評価する立場もありうる。しかし、王仁三郎の「皇道」を、単なる妥協の産物であると考えるのは一面的すぎるだろう。王仁三郎は、天皇や神道そのものを否定したわけではない。ただ、現実の社会、神道を批判して、別の社会、神道を描き出そうとしている。

こうした理想は、固定した形、あるいは政治的な制度として記述されてはいない。大本は現実を批判し、その根本的な改造を主張する。しかし、その理想世界は「ミロクの世」として表現されるが、そこで実現されるべき社会が具体的に記述されるわけではない。それを実現する過程も、政治や社会における実践のあり方も描かれるわけではない。王仁三郎が政治的な行動に関与しているように見える場合も、それを政治的な水準で評価するなら合理的な企画に基づいているようには思えない。現実離れしているし、あるいは時流に左右されているにすぎない側面もあろう。王仁三郎自身が自らの思想の本来のあり方を維持していたかどうかは断言できない。しかし、おそらく王仁三郎の行動は、本来的にはあくまでも宗教的な行為として、あるいは、宗教的な観点から捉えられるものであったと思われる。

とはいえ、王仁三郎がどのような「ミロクの世」を考えていたのかは、宗教的にも明確ではないのである。大本の思想として、一貫して主張されるのは「霊主体従」という概念で

ある。それは体主霊従、「われよし」、すなわち利己主義的な態度の否定である。さらに、『霊界物語』第二十八巻でも強調される、一夫一婦制の重視である。それは神の規則なのだといわれ、男女関の感情のもつれがたびたび描かれる『霊界物語』の中で、折りに触れて強調されている。こうした正しい態度が、人間のあるべき姿の基本であり、それが不正な現実を立て直す「敬神」の根本である。

王仁三郎は、軍隊式の組織を作ったりするが、思想表現としては、あくまでも平和主義を説いている。『霊界物語』では、対立や闘争がたびたび描かれるが、そのつど平和主義への希求が説かれ、正しい戦いはあくまでも「言霊戦」、つまり言葉による戦いであるとされる。神に祈ることもそうであろうが、たびたび出現するのが、「言向けやわす」「宣り直す」という考え方である。「言霊」の力を発揮して、悪を改めさせ、誤った出来事を「宣り直す」ことにより、正しく改めることが正当な方法として提出されている。ただ、この場合の言葉の力とは、その内容、主張の正しさそのものの力ではない。もちろん、「霊主体従」に即したものでなければならない。利己主義的なあり方ではいけない。しかし、一方では、善と悪の区別は絶対的なものではないとも主張されている。善悪の相対主義は、王仁三郎が繰り返し説くところである。第二十八巻の前史でも触れたとおり、いったん成立した理想状態は、時間の経過とともに弛緩するようになり、やがてそこから悪が発生、拡大するようになり、ついには全体的な混乱に至るのである。したがって、第二十八巻の第三篇の最後で訪れたカールス王と真道彦の体制も、それが永続するという性格のものではない。これは、『霊界物語』におけるスサノオの描かれ方にも関わっている。『霊界物語』はスサノオの働きによって「国祖」が復活することで完結するはずであるが、そういう結末はついに訪れない。物語の中でも、活躍するのはスサノオより、悪役の高姫であったりする。王仁三郎が結末を重視すれば、『霊界物語』八十三巻中のどこかで、結末を書くことはできたはずである。しかし、最後に書き足された部分でさえ、この世の創造の物語なのである。最終的な事態は固定的に描きえないものなのではないか、という疑問が生じる。「ミロクの世」「スサノオの神業」といっても、それが具体的に描かれることはない。なおの時代から、「三千世界に梅の花が咲く」とはいわれても、花の咲いた後の世界が具体的かつ、永遠的なものとして描かれたことはないのである。

出発点に確定した体験を持たず、到達点にも確定的な事態を描くことができない。したがって、すべては相対化され、唯一認められるのは、その過程における行為のあり方、すなわち「霊主体従」という内面的な態度だけになる。

王仁三郎が学んだ「言霊学」もまた、文章に隠された真意を明らかにするように見えるが、実は果てしない解釈を可能にし、読み取られた意味は果てしなく相対化するのである。「言霊学」とは、「学」とはいうものの、一般の学問とは性格を異にする。日本語のそれぞれの音節、すなわち「あいうえお」以下の音にそれぞれ意味を与え、それによって、文章の意味を解釈する。この方法はさまざまの場所で用いられているが、『霊界物語』の最後に書き加えられた「天祥地瑞」では、宇宙の成立を説明するのに利用されている。また、二つの音の子音と母音を分離結合させ新しい音を作り、そこから別の解釈を引き出すことも行なわれる。つまり「は」と「し」から「ひ」を引き出すといった方法である。こうした方法を使った例としては、『古事記』の解釈が代表的なものであるが、それ以外にも、謡曲の詞章を言霊学的に解釈した文章も存在する。[16] こうした「言霊学」の方法は、常識的な言語理解と比較すれば、恣意的に思える解釈を可能にする。そもそも、特定の音がなぜその意味を持つのか、その音の結びつきがなぜ正当化されるのか、そういう点についての明確な説明はないのである。通常の文章の中に、まったく異なる意味を浮かび上がらせることが可能になるが、その理由は論理的に説明されない。したがって、こういう方法で出現する解釈を承認できる人は少ないだろう。信仰している人なら、これを一応は認めるかもしれない。しかし、ここで指摘したいのは、こうした解釈は、果てしなく新しい解釈を生み出していく可能性を持っているということである。そして、そのような解釈もまた、一つの「宣り直し」となるということである。「鎮魂帰神法」や「言霊学」も、方法とはなりえても、目的とはなりえないのである。

王仁三郎の信仰において具体的なものは、「ミロクの世」などの理想状態ではなく、つねに「霊主体従」の立場から「宣り直し」ていくことなのではないかと思われる。王仁三郎の相対主義は、「皇道」にも及ぶ可能性はある。王仁三郎には日本を世界の中心に置こうとする日本主義的な言葉も存在する。もちろん、「皇道」の重視は大本の大きな要素である。しかし、一方では、それとは対立する言葉も存在している。「皇道」を主張するが、他の宗教や外国の文化すべてを否定するのではなく、万教同根として世界のすべての宗教を認めようとする。あるいは、エスペラント語の使用を推進しようとする国際主義的な指向もある。おそらく重要なことは、固定化された目標や思想ではなく、果てしなく「宣り直す」ことなのだろう。

このような「宣り直し」は、現実の社会、制度を誤ったものと捉え、言葉の力によってあるべき状態へと語り直そうとする。最終的な理想状態は明確ではないが、明確でないまま

であっても、大本という宗教の実践は可能なのである。あるいは、現在における実践は、それ自体理想状態を実現していなければならないといえるかもしれない。一方、現実の宗教的実践、人間の行為はいかに理想的にあろうとしても、不十分なものであるといえる。王仁三郎は、このような宗教の表現と行為に含まれる根本的な矛盾を、永遠の「宣り直し」によって克服しようとしているのではないだろうか。

註

（1）『霊界物語』に関する文章を書籍とネット上で活発に発表している飯塚弘明は、次のようにいっている。「『霊界物語』は大正10年（1921）に第1巻が書かれてから、すでに90年以上経つ。しかしまったくと言っていいほど世に知られていない」（『超訳 霊界物語』太陽出版、二〇一三年）。『霊界物語』は、現時点では、八幡書房、愛善世界社の二社から出版されている。また、オンラインで入手できる電子版があり、飯塚弘明の運営しているサイト「オニド　王仁三郎ドット・ジェイピー」のダウンロード用のページからも入手できる（http://dl.reikai monogatari.net/#rm）。各版に相違がないわけではないが、王仁三郎自身が校正を加えた、いわゆる「聖師校正本」を底本としているので、基本的には大きな相違はない。なお、大本教そのものの概略については、拙稿「『初発の神諭』を読む（1）」（『神田外語大学日本研究所紀要第5号』、二〇一三年）参照。

（2）松本健一『出口王仁三郎』（リブロポート、一九八六年）、一五六頁。

（3）飯塚、前掲、一一三頁。

（4）飯塚弘明『霊界物語入門ガイド』（二〇一一年、現在はAmazon の Kindle ストアで発売）。

（5）『新月の光』（二〇〇二年、八幡書店、下巻、四五〇頁。原本は日本タニハ文化研究所より、一九八八年刊）。

（6）出口和明、窪田英治、出口三平鼎談『スサノオの宇宙へ』（あいぜん出版、一九九四年）は、霊界物語の全体の内容を十四にわけ、ほぼ六巻ずつを一回とする鼎談で語り合うという形で作られた書籍である。したがって、五回目の鼎談では、二十五巻から三十巻が扱われているわけで、当然、二十八巻もそこで触れられるべきものである。その回の終わりに近い部分で、窪田は次のように語っている。「二八巻の台湾物語は、第二次事件とも関連するということで、最後に十分語りたいと思ったのですが、時間超過ですか」。第二次事件との関連といわれているのは、この部分の内容が、二回目の大本教弾圧に

関連する記述があるという受け止め方があることを示している。そのことは、ここでは触れないが、『霊界物語』の全体を語るとき、この部分を除いても、語ることができると思われていたことがわかる。また、出口三平が「台湾の真道彦やその息子たちの物語は、琉球の神霊世界もかかわって、ほんとすごいけどなア」と語ったのに対し、窪田が「それだけで一冊の本になる」といっているように、この部分が神話として注目すべき内容を持つものであるとも評価されていることがわかる。

(7) 大本教学編纂所編『大本のおしえ』(天声社、一九六七年)。

(8) 国学が展開した近世の神話については、斎藤英喜『異貌の古事記』(青土社、二〇一四年)参照。

(9) このサイトも、『霊界物語』や出口王仁三郎に関する、主催者の論考を掲載している。また、多くの資料を電子化して掲載している。本稿も、その学恩を受けている。サイト名「うろー」(http://uro.sblog.jp/)。

(10) 大本七十年史編纂会編『大本七十年史』(大本、一九六四〜一九六七年)、および先にあげた飯島弘明のサイトの記事による。

(11) 飯塚弘明は、集団で日本の統治時代に存在した大本教の建物、歌碑などの痕跡を求め調査を行なっている。しかし、その熱心な調査にもかかわらず、それらの痕跡はわずかしか見つからなかったと報告されている。

(12) 『大本七十年史』上巻、一一一頁。

(13) 『大本七十年史』上巻、一五八頁。

(14) 外的な宗教行為である儀式を「顕斎」というのに対し、内面的宗教行為を「幽斎」という。木庭は、「真心をもって主の神様に祈る無形の祭りのこと」と説明している(「霊界物語小事典」〈『霊界物語ハンドブック』八幡書店、二〇一〇年、所収〉)。

(15) こうした国家神道、国体論、出雲の信仰との関連については、以下を参照。小島毅『靖国史観』(ちくま新書、二〇〇七年。同増補版『増補 靖国史観』ちくま学芸文庫、二〇一四年)、子安宣邦『国家と祭祀』(青土社、二〇〇四年)、原武史『〈出雲〉という思想』(講談社学術文庫、二〇〇一年)。

(16) 出口王仁三郎『古事記 言霊解』(みいづ舎、二〇〇四年)、『出口王仁三郎全集 五』(あいぜん出版、一九九八年)。

付記

本稿は、平成二十四年度佐野学園研究助成制度の在外研究(実施は平成二十五年度)による研究成果の一部である。